

山里の国際派小学校教師 — 島崎捨三 —

第64回東北エスペラント大会 公開講演会
「二人の島崎 — 1世紀前にエスペラントで
世界とつながった市井の人々」

2026-09-05
仙台市青葉区 仙台市戦災復興記念館

後藤 斉 東北大学名誉教授
(東北エスペラント連盟・仙台エスペラント会会長)

1

目次

- 1. 概要
- 2. 国際語エスペラント
- 3. エスペラントによる海外文通
- 4. 島崎捨三
 - 4.1 島崎捨三の経歴
 - 4.2 島崎捨三のエスペラント歴
 - 4.3 島崎捨三のエスペラント文通
- 5. まとめ

2

概要

1世紀前にすでに、エスペラントは市井の人々が世界とつながる国際語であった。たまたま同姓の二人の島崎さんを取り上げて、

⇒ 国際交流におけるエスペラントの意義を例証

島崎捨三は、当時の山間部の小学校教師としては珍しく、国際的であった。児童画の交換など、その立場にふさわしいやり方でエスペラントを実用した。

3

2. 国際語エスペラント

1887年、特定の国や民族に属さない中立の国際語として、ザメンホフがエスペラント博士の筆名で『国際語』（『第一書』）をワルシャワ（ロシア帝国領）で出版して提唱。

初めはロシア語版、引き続き、ポーランド語、フランス語、ドイツ語、英語の各言語版。
40ページ + 単語集（約900語）。

「人工語」と呼ばれることも。



2. 国際語エスペラント

19世紀末～20世紀初頭 フランスを中心にヨーロッパ各地に広がる

1905 フランス、ブローニュ・シュル・メールにて第1回世界エスペラント大会、以後定例化し、2度の世界大戦の間を除き、毎年開催。

2024 第109回世界エスペラント大会 タンザニア・アルーシャ。初のアフリカ開催。

2026 第111回世界エスペラント大会 オーストリア・グラーツ

5



6



2. 国際語エスペラント 日本において

- 1887 ザメンホフ『第一書』
- 1888 読売新聞で紹介
- 1903 吉野作造「世界普通語エスペラントー」(『新人』)
- 1905 第1回世界エスペラント大会
- 1906 二葉亭四迷『世界語』。黒板勝美ら日本エスペラント協会創立。第1回日本エスペラント大会
- 1919 日本エスペラント学会(現協会)創立
- 1965 第50回世界エスペラント大会(東京) アジア初
- 2007 第92回世界エスペラント大会(横浜)
- 2026 第113回日本エスペラント大会(千葉)

8

2. 国際語エスペラント 戦間期の日本

- 1920 ラムステット、フィンランド公使として来日。
- 1921 エロシェンコ、日本から追放 (1914来日)。
- 1921 新渡戸稲造、第13回世界大会(プラハ)に参加し、好意的な報告書を国際連盟に提出。
- 1922 衆議院、エスペラントに関する調査請願を採択。
- 1926 日本エスペラント医学協会設立。
- 1927 鉄道省、Gvidlibreto por Japanlandoを発行。
- 1927 清見陸郎訳『寡婦マルタ』。
- 1930 黒川眸訳『悲惨のどん底』。ペレール来日。
- 1937 長谷川テル、中国に渡り抗日運動に参加。

9

2. 国際語エスペラント 時代背景

戦間期(第一次大戦後から第二次大戦開始まで)は世界的に平和思想が高まった。日本では大正デモクラシーとも重なる。これを背景に、世界的にも日本でもエスペラントの高揚期を迎えた。

1919年に創設された日本エスペラント学会(現(一財)日本エスペラント協会)のほか、さまざまな形でエスペラント運動は展開され、宗教やプロレタリア運動からエスペラントに近づく人もいた。

有名人としては、吉野作造、新村出、秋田雨雀、柳田国男、伊波普猷、比嘉春潮、宮沢賢治など。支援者には新渡戸稲造、後藤新平、安達峰一郎など。ただし、知識人や学生だけでなく、多くの一般庶民もエスペラント運動に参加した。

10

3. エスペラントによる海外文通

戦前期においてエスペラントによる国際交流を実践する手段は限られていた。

- ・ 国際雑誌の購読・寄稿
- ・ 在留外国人・訪日外国人との交流
- ・ 「外地」(台湾・朝鮮など)における現地住民との交流
- ・ 主にエリート層(役人・学者など)・富裕層(貿易商など)による外国出張・旅行(中国・ロシア極東、欧米)

市井の大部分の日本人エスペラントにとって、
国際語エスペラントを実践する現実的手段は海外文通

11

3. エスペラントによる海外文通

Esperantoの上達の一方法として、亦、Esperantoに対する興味を、研究を長く継続させる為の一方法として他国人と文通をする、此が推奨すべき事であるとは誰も同様に認める事でせう。そして幸にも尊敬すべき人、Esperantoに関し、或は個人的にも話すに足るべき人を得た時、眼前が広くなった様な気持を感じ全く嬉しいものです。

かう言ふ私も其の一人です。[...]外人と文通を始めましてから常に感ずる事でありますが、如何に卒直に、然も簡単な言葉を使つて、遺憾なく自分の意思を充分に表明して居るかと云ふ事です。

[...]それぞれ各自の趣味に応じて、bona samideano [よい仲間]を広く海外に求めると云ふ事は、独り自分自身の向上の為のみならず、亦時には国際親善の為に意義ある事ではないでせうか。 [...]

果山かづ子「オランダのamikino [友]を得て」La Fervojisto (日本鉄道エスペラント連盟), 41 (1935. 2).

12

4.1 島崎捨三の経歴

島崎捨三 (しまざき・すてぞう)
1900.4.1～1956.3.12



宮城県伊具郡金山町(現丸森町)出身。宮城県角田中学校を卒業(1919年)し、その直後から定年となる晩年の55年まで母校の金山小学校教員。

ローマ字教育に熱心で、同校のローマ字教育は県下でも有名に。

13

経歴



丸森町の位置

14

4.2 島崎捨三のエスペラント歴

島崎捨三 (しまざき・すてぞう)

1919年、エスペラント独習。22年、ロシア革命を逃れて1919年に日本に亡命していたロシア正教の司祭**セリシェフを自宅に3泊招待**(汽車賃も負担)。

24年、**第12回日本エスペラント大会(仙台)**で、公開の**展覧会にエスペラントで集めた各国児童の絵画数十点を出品**。25年、セリシェフの“Oriento”発行に協力。

ドレスデン近郊の小学校教員オットー・ライヒェルト(Otto Leichert)と30年以上文通を続けたほか、盛んに海外文通。また、30年間エスペラントで日記を書く。

のち息子の康雄もエスペラント学習。

15

4.2 島崎捨三のエスペラント

セリシェフを自宅に招待

(La Revuo Orienta 1922.6)



1922.5.20 夕刻に最寄り駅着、10キロの山道を自転車で見越える。青年団員らと夕食、ビールで乾杯

5.21 寺と製紙工場を訪問 住職と夕食談

5.22 学校に終日いて、全クラスを訪問。放課後に果物とお菓子を食べながら全教員と懇談し、シベリアの学校についてスピーチ

5.23 雨天につき、予定を切り上げて帰京へ。自動車で駅へ向かう途中に、女学校でピアノとロシア歌謡を披露

16

4.2 島崎捨三のエス

“Oriento” 創刊号(1925)表紙
(成城大学柳田文庫蔵)

発行者のセリシェフは、1924年まで日本に滞在したのち、ハルビンに渡る(のちオーストラリアへ)。

タイトルの「東洋」が示すように、中国、日本、朝鮮、台湾、モンゴル、チベット、シベリア、ジャワなどの歴史、社会、民族誌、文学等を扱う、写真を多く掲載する全文エスペラントの月刊誌として刊行されたが、2号までで廃刊。発行部数は不明。裏表紙の協力者欄に島崎の名前。



17

4.2 島崎捨三のエスペラント歴

「エスペラント 島崎捨三氏はエスペラントの先駆者として此の町から平和と人道の聖戦を創造してる。」

伊具郡教育会編『伊具郡誌』(1926)

島崎の活動が、大正末期ごろの山あいの小さな小学校にはめずらしい国際交流活動として、小学生はもちろん周囲の人たちにも大きなインパクトを与えたものと推測される。

18

4.3 島崎のエスペラント文通

チェコスロバキア（現チェコ共和国）Oslavny 在住のエスペラントイスト Fr. Holešovský から島崎に宛てられた手紙がある。封筒の消印は1929年5月6日発を示しており、金山町の本郷金山郵便局では5月25日に受け入れている。

この時期は、仙台エスペラント会の活動の沈滞期で、1929年に東北大に入学した桑原利秀らを中心にして活動が再び活発になる第二期が始まる直前にあたる。島崎は山里に勤務して近隣に仲間がいない中で、着実にエスペラント活動を行っていたことがわかる。

19

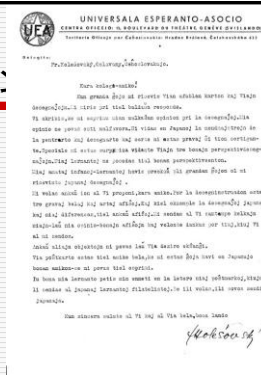
4.3 島崎のエスペラント文通

発信者のFr. Holešovskýは不詳。文面からすると島崎と同じ小学校教師だったようで、島崎から児童画を送ってもらい、その出来栄えに感心し、生徒たちにも見せて喜んでもらった。島崎との間で児童画やポスターや物品、切手などの交換することを提案もしている。

継続的に文通していることが分かる。島崎の熱心な活動ぶりを証言するものだ。

20

4.3 島崎のエスペラント



21

4.3 島崎のエスペラント

1937年11月30日『東京日日新聞』（宮城版）

「支那事変に関する海外諸国の曲解を是正」するために、新聞論説・記事などをエスペラント訳してドイツの小学校教員などの文通相手に送ることになった。

→戦後は、エスペラントイストによる戦争協力例との評価も。

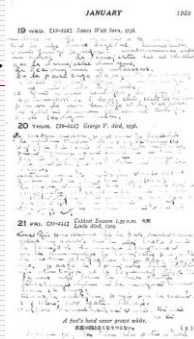
主な相手は、ドイツの小学校教員オットー・ライヒェルト (Otto Leichert) で、30年以上続いた文通相手。島崎の主目的は、政治的な意見の宣伝というより、教員仲間との交流の一環だったと考えられる。



4.3 島崎のエスペラント

島崎は死の前日まで30年間にわたって、エスペラントで日記をつけていた。空欄の時期もあるが、日々の行動や感想をかなり克明に記録した部分も多い。自分のための覚書という日記本来の目的のほかに、孤立した環境で語学力を維持するためという意味もあったのではないかな。いずれにせよ、なかなかまねのできることはない。

島崎は、長く勤めた小学校を定年退職して一年ほどで急逝した。退職後は、エスペラントをほとんど唯一の生活として、「わたしが死んでも、そのあとで、エスペラントがほんとうの国際語になるときがかならずやって来る」との強い確信を家族に語っていたとのことだ。



島崎の日記の一部
(1938.1.19-21)

まとめ

島崎捨三は、当時の山間部の小学校教師としては珍しく、国際的であった。不利な環境で独学であったにもかかわらず実践的な語学力をつけた上で、児童画の交換など、その立場にふさわしいやり方で国際語エスペラントを実用した。

時代は移り変わるが、国際交流におけるエスペラントの意義を例証するものだ。

24